

《第75回例会》講演会

# ピウスツキと日本、北海道、先住民族

～2020年東京五輪までに意識しておきたい人物史～

講師：新井 藤子（北海道大学大学院）

日時：2016年2月20日(土)14:00～16:00

会場：札幌エルプラザ 4F 中研修室(北8西3)



ブロンスワフ・ピウスツキはポーランドのアイヌ民族研究者として知られる。1866年、現在のリオニアに生まれ、19歳の時にロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリンへ流刑となり、刑期満了後も日本、米国、西欧を巡り、民族資料の収集、調査、それらに係る執筆、展示等に従事、第一次大戦下には、他者理解の手段として百科事典の編纂を行い、究極の平和に結びつけようと奔走した。

このような説明は、井上紘一ら日本の研究者が1970年代から行ってきたピウスツキの経歴や業績の掘り起こしによって定着した。彼らの研究活動は、ピウスツキの民族研究者としての人物史を構築するとともに、2013年、白老のアイヌ民族博物館における胸像の建立に結実した。

しかしながら、日本社会におけるピウスツキの認知度は現在もあまりに低く、彼に関する情報は常に特定の研究者に由来する。また、胸像はポーランド

政府による「寄贈品」であり、そこに日本の主体性をみることは難しい。2020年東京オリンピック・パラリンピックを機に、北海道にも諸外国からの訪問客が増えるなら、その際、白老の地でピウスツキについて説明できる日本人はどれだけいるのだろうか。

そのような問題意識から、この講演では、会場のみなさまと情報を共有し「日本の文脈からピウスツキを諸外国に説明できる」途をさぐりたい。

そのため、ピウスツキの最初の公的な実績となった、1900年パリ万国博覧会での極東先住民展示に焦点をあて、講師が明らかにした展示の実態、実情を出発点に考察を進める。

\*1928年の博覧会国際事務局発足まで、オリンピックは万国博覧会附属のスポーツ大会として開催されていた。博覧会を通じて民族を考えるとオリンピックとは無関係ではない。

ピウスツキの生い立ちや業績を通して、日本の何がわかるのか、北海道は彼とどのように関わったのか、その民族研究は日本の民族のあり方のどのような面を明らかにするのか、日本人の主体性を問う時間を共有したいと思っている。（新井藤子）

〈講師紹介〉あらい・ふじこ 1972年大阪生まれ。社会人入試を経て、2012年より北海道大学大学院文学研究科(北方文化論専修)修士課程在学。専攻は博物館学。民族学者という従来のピウスツキの人物史に「博物館活動家」という新たな側面を加えることを目標としている。



パリ万国博覧会ニヴフ展示 (L'Exposition de Paris, 1900)

## 《後援行事》

NPO 法人まざるか北海道  
第5回東日本大震災被災者支援  
コンサート「私たちは忘れない！」

2016年3月6日(日)開演 14:46  
光塩学園 koen 天秘ホール(大通西14)  
参加費:一般 4,000円  
ピアノ演奏:遠藤郁子  
プログラム:ベートーヴェンピアノ・ソナタ第14番「月光」、ピアノ・ソナタ第23番「熱情」  
ショパン/バラード、マズルカ、エチュードより  
問合せ:オフィス・ワン TEL 011-612-8696

l'amitié ラミティエ ～保育者・  
教員養成校教員有志によるコンサート～

2016年3月21日(月・祝)開演 13:30  
六花亭札幌本店・ふきのとうホール(北4西6)  
入場料:一般 2,000円、学生 1,000円  
出演:(ピアノ)伊藤桂子、長崎結美、須藤宏志、田中宏明、木村貴紀、(声楽)橋本卓三、松井亜樹、石田久大、[客演]石田敏明、大石沙季(ピアノ伴奏)、山本聖子(ヴァイオリン)  
曲目:ショパン/バラード第1番、バラード第3番;リスト/ラ・カンパネラ、歌曲「おお、愛せる限り愛しなさい(愛の夢)」ほか  
連絡先:TEL/FAX 011-742-1708(松井)

《第74回例会報告》

## 久山宏一氏の講演を聞いて

越野 剛

当日は、50席ほどの小さな会場に40人近くの聴衆が集まり、ほぼ満席の盛会だった。

アンジェイ・ワイダの『灰とダイヤモンド』(1958)といえば銀幕全盛期の名作のひとつである。歳月を経た白黒の映像はこの映画が「古典」であることをいやおうなく感じさせるし、革命と戦争をめぐる深刻な政治テーマが語られるのであれば背筋をのばして観ざるをえない。しかし久山氏の講演は『灰とダイヤモンド』を撮ったワイダはまだ弱冠32歳の駆け出しの監督であり、「若々しさ」がこの作品の帯びるオーラであったことを明らかにしてくれた。

ワイダの映画が60年代の日本の若者に受けたのは、なによりもツイブルスキが演じる主人公マチュクがカッコよかったからだという。サングラスをかけ、酒場でウォッカに火をつけ、ゴミ捨て場でのたうちながら死んでいく。それらの身振りにはちゃんと理由があるのだが(黒メガネは地下水道でのパルチザン

戦で目を病んだから、火酒を燃やすのは死んだ戦友の追悼のため)、そうした文脈を切り離してマチュクの演技は模倣の対象となっていく。大島渚、吉田喜重など60年代の日本映画や、ゴダールなどの外国映画から豊富な例を引いて、久山氏は当時の俳優たちが『灰とダイヤモンド』を真似、そこからカッコよさを抽出したありさまを見せてくれた。これまた若いころの大島渚がワイダについて熱く語る珍しい映像も観ることができた。

ワイダは画面の動きとモノの配置にこだわる構図絶対主義者だったという指摘も面白かった。私のような素人鑑賞者にはとても気がつきようもない点だが、疾走する列車の向きが次の場面で逆になったり、登場人物の位置関係が矛盾したりしているという。久山氏はそれを若いワイダの未熟さではなく、物理的なリアリティよりも映画という動く絵の構図の美しさを重視したからだと喝破する。

久山宏一氏はポーランドの文学と映画の専門家として知られ、大胆な仮説を豊富な引用と分かりやすい言葉で解き明かす手法には定評がある。翌日はポーランド映画祭で解説者を務めるという多忙なスケジュールのなか、本講演を引き受けてくださったことに感謝したい。(こしの ふう)

《第75回例会報告》

## 新井藤子氏の講演を聞いて

岩浅 武久

新井さんの講演はかなり特殊なテーマかと思われたが、土曜の午後に30人近い聴衆が集まった。

講演ではまず1900年パリ万国博覧会の映像資料が紹介された。これは確かに珍しいもので、エジソン社が撮影した「動く歩道」の動画その他のパリ万博の映像に文字どおり目を奪われた。

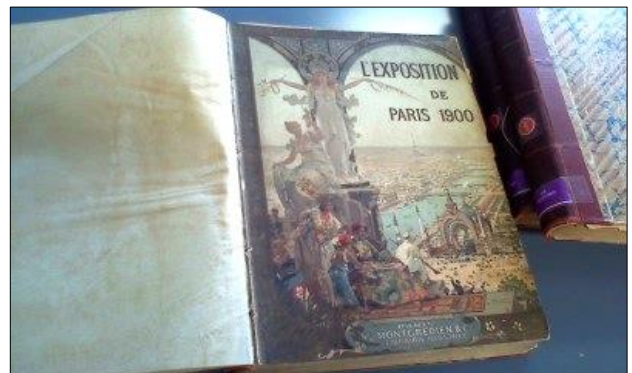
つぎに紹介されたのが、パリ万博の「ロシア・シベリア展示館」内部の写真。これは *L'Exposition de Paris* (1900) 3vol. (オリジナル版とその復刻版) で確認された「ニヴフ展示」画像と、新井さんが米国スミソニアン博物館から受領したデータで確認したステレオ写真の「ニヴフ展示」である。

それがサハリン・ニヴフの衣服や道具であるとする新井さんの推論は、画像から十分に納得できるものだった。今後の研究によって、ピウスツキがパリ万博に向けて準備した展示品のリストが解明され

たとき、パリ万博に関するピウスツキの業績の全体像とその意味も明らかになったと言えるのだろう。

パリ万博のニヴフ展示の紹介は非常に興味深く、これに関わるピウスツキの姿が目につかぶ思いがした。ただ講演案内にあった「ピウスツキの生い立ちや業績を通して、日本の何がわかるのか、北海道は彼とどのように関わったのか、その民族研究は日本の民族のあり方のどのような面を明らかにするのか」という課題について、会場で十分にお話を聞く時間がなかったのは残念だった。

(いわあさ たけひさ)

パリ万国博覧会百科事典 *L'Exposition de Paris*, 1900 原典

## 第75回例会講演要旨 ピウスツキと日本、北海道、先住民族

新井 藤子

この度は皆様からこの場の意義を何倍にも耕していただきましたこと、誠にありがとうございました。

講演の目的は、今後北海道を訪れる海外の方々に B・ピウスツキをいかに説明してゆくかを皆様と一緒に考えることでした。2020 年東京五輪パラリンピックを迎えるにあたり、同じ日本の一地域である北海道も海外からの視線を意識すべき時に来ていると思います。その際、自己の居住地の事物について対外的に説明できなくてよいのかという、私自身の自省的な問題提起も含んでおります。

2013 年に白老に建立された胸像は、日本国内でのピウスツキ研究の成果がいったんの結実をみたことを示す反面、ポーランド政府からの寄贈という他者の主体性を強くもちます。モニュメントは明確な伝承意図をもって次世代へ語り継がなければ、容易に経年による忘却を許してしまいます。日本では蠟管レコードで知られるピウスツキですが、蠟管は彼が先住民調査に用いたツールの一つに過ぎず、実際に成した偉業はもっと別の、さらに広い世界に関与していることをお伝えしたくもありました。

**1. ピウスツキの紹介:** 民族調査研究の手腕を買われ、のちに博物館活動にも多く携わりました。その第一歩として、1900 年パリ万国博覧会においてロシアの極東地方の出展品の選定を担当し、メダルを受賞するという功績も得ています。

**2. 万博とオリンピック:** 1900 年パリ万博の現存するモノクロ映像は YouTube で確認できますが、この時代の万博と現代の万博は、国際博覧会条約が締結された 1928 年を境に大きな違いをもちます。

この時代のオリンピックは万博の附属大会として開催され、万博とともに、教育目的をもったライバル意識の平和的利用により、国家や民族性という意識を新しい形で鮮明にしたと言えます。展示や建造物に国ごとの特色を打ち出すというコンセプトが生まれたのもこの時代です。

また、大和総研のウェブサイトのあるコラムは、20 世紀には「開発型」「国威発揚型」であった万国博覧会が、21 世紀に入って人類共通の課題の解決策を提示する「理念提唱型」に転換したことに触れ、こうした趣旨の変容がオリンピックにも及んでいると指摘しています。

**3. 1900 年パリ万博の特徴:** 帝国主義の文脈の下、フランスが威信をかけた万博史上最大規模の博覧会でした。会場に使用される動力はすべて電

気で、それは夜通し輝くパヴァリオン（パヴァリオン）の電飾、会場内を導く「動く歩道」などを実現しました。

万国博覧会はイギリスでは Great Exposition、フランスでは Exposition Universelle と呼ばれます。これはフランスの素案をもとに先んじて 1851 年ロンドン万博を成功させたイギリスとの違いを強調したためです。単に国際規模の博覧会という意味ではなく、宇宙的視点から地球上に存在する万物を展示し、それらがすべて一つの体系によって統合されていることを明示する、という意味を表します。施設の配置は未開（とみなされ、当時は幻想をもつてはやされました）から文明へという社会進化論的なヒエラルキーを、西→東という水平方向ではなく、文明の象徴であるエッフェル塔が植民地会場を眼下に見下ろす形で上下方向に作用させていました。

ピウスツキが選定に携わったと考えられる出展品の展示はこの構図の只中であって、当時の絵入り新聞では「無造作な展示品の配置、ワイルドなところがよい」、学術報告誌では「先住民の実状を伝えるものではない展示の多い中、大変よい展示物を取り扱っている、よくできている」と好評を得ました。

先住民の生活や文化の実状は、当時、一般人には容易には知り得ないもので、一部の探検家や研究者のみが見聞できるものでした。パリ万博を総括した当時の百科事典には、イメージのみで描出されたと思われる諸民族の挿し絵がみられます。

**4. 写真資料の紹介:** 1900 年パリ万博の「アジア・ロシア」セクションにおける先住民展示の写真資料です。現状では確認できませんが、ピウスツキが出展品の選定に関与した可能性が高いと考え、北大図書館、日仏会館図書室、スミソニアン博物館等から入手したものです。それらは万博の土産物用のステレオ写真（特殊スコープを通すと 3D を楽しめる左右組の写真）や、博物館資料として収蔵されているガラス乾板のネガなど、様々な形で現存しています。今後もこれらを検証してゆくことで、当時の先住民の在り方、ピウスツキとの関わりがより詳しくわかるのではないかと期待しています。

**5. 写真に見える展示品の解説:** 画像を拡大すると、展示品の細部や展示の構造がみえてきます。北大資料から発見した重要なキャプション部分が日仏会館やスミソニアン博物館の収蔵資料を経て鮮明に解読でき、「サハリンのギリヤーク（ニヴフ）」の人形展示が実在したことが明らかになりました。

展示品の至るところに値札の存在が認められ、日ごとに展示の配置が違えられた可能性があることもわかりました。展示された先住民の生活用品のまわりには国家の商業資源としての動物の毛皮や剥製がふんだんに敷き詰められ、ピウスツキが1898年に発表した論文にみられる先住民の暮らしの窮状からはかけ離れた様相を呈しています。

これまで製作意図がはっきりしなかった先住民の櫛の模型も、漁撈や採集などの仕事を失う冬場、シベリアの諸先住民に与えた政府伝書使(郵便事業)の仕事の様子を伝えるため、フランス国家が特に製作させたものであることが明らかになりました。

文献資料の記述によれば、ピウスツキの選定した出展品には、ニヴフだけではなくアイヌやチュクチなどのものも含まれていたようです。

**6. そこから見える日本:**1904年に日露戦争が勃発すると、ロシアはセントルイス万博への参加を辞退し、帝国主義の崩壊へ向かいます。一方、日本は世界進出を目指し帝国主義国家への道に踏み出しました。この時点で、パリ万博ではロシアの領土のうちに扱われたアイヌという民族名が、日本の帝国主義の下にある民族名に移行します。

**7. そこから見える北海道:**ピウスツキは1903年にアイヌ民族調査のために白老を訪れ、さらに平取や他地域への踏査を試みましたが、開戦が迫り、ロシア大使館から撤退の訓令が出て断念しました。交流したアイヌから人柄を信頼される一方、一般の人々からロシアの臣民とみなされ警戒されました。

**8. そこから見えるアイヌ・ニヴフ:**5で触れたピウスツキの論文の記述と写真資料とを突き合わせると、先住民の実状を示すかのようにみえる展示が、必ずしもそうではないことがわかります。論文には、ニヴフを窮状に追い込む開拓者や植民地主義への憤りが示され、魚の塩漬けや馬鈴薯の栽培など、ニヴフが新たな生業を確立するための応用人類学的ともいえる手助けとその顛末が記録されています。

樺太アイヌ(エンチュ)に関しては、識字学校の設立や統治規定草案の起草などを行いました。

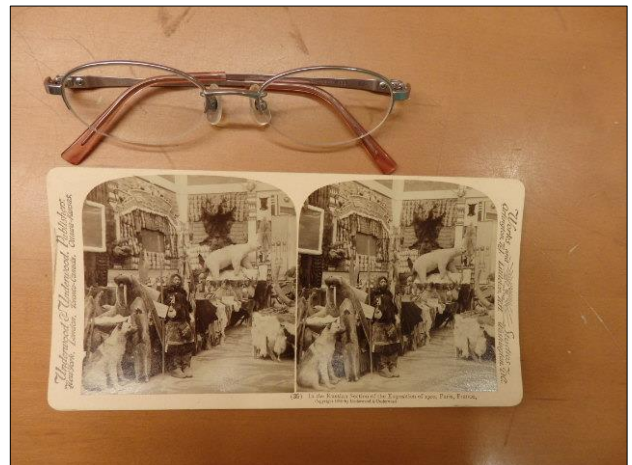
**9. 結び:** 今後は、学問研究により構築された人物史や、地方創生という国の政策の下で説明されるピウスツキのほかにも、道民が独自に「マイ ピウスツキ」を考えてみることで真の顕彰に繋がるのではないのでしょうか。それにより白老の胸像の取り扱いも明確に、活発になると思います。

同時に、歴史的物事を調べるために写真資料を見ることの有用性と、写真は決して見たままを物語るものではないことも改めて明らかになりました。史実を理解する際には注意が必要とも言えます。

**10. 私が考える今後の顕彰のカタチ:**最終的にはピウスツキの関与した民族展示を立体映像で再現したいと考えています。様々な場所への持ち運びや映写、発信が可能です。

**11. いただいたご指摘の一部:**①立体映像での再現の際の彩色の整合性はとれるのか。推測による彩色をどう思うか。②ピウスツキは万博出展品を選定したが、パリには出向かず展示設営にも参与していない。万博における先住民展示の調査や再現が果たしてピウスツキ研究や顕彰になるのか。③ニヴフの人形が首から提げている飾りに穴開き銭やヒスイの存在が認められる。遠距離交易や装飾品としての価値のありようを見て取れる。④ピウスツキのことは蠟管レコードの一件で知っていたが、この講演に至る研究の発端は何か。

以下、応答内容を記させていただきます。①恐竜化石のような発掘物の復元展示にみられますが、十分に検討したその時点の結果を示すことも大切だと思います。②現存するピウスツキの収集資料がどのような文脈の展示構築に用いられたかを示すことは、ピウスツキの業績を視覚的に人々に伝える一つの手立てになると思います。③今後の研究の参考にさせていただきます。④蠟管レコード再生事業は、日本国内のピウスツキ研究の発端です。私はその研究過程や成果をみて育ち、今の自分の研究に至りました。(あらい ふじこ)



「ニヴフ展示」のステレオ写真(ステレオスコープ方式)

原寸は縦約9cm、横約17cmだが、写った展示品の細部やキャプションの文字を肉眼で確認できる。ステレオ写真は専用のビューアーを使ったり、裸眼で視点を工夫したりすることで被写体を立体的に見ることができ、当時は土産物として流行した。アジア・ロシアセクションの一角を示す本資料はアンダーウッド&アンダーウッド社が量産したもので、生産数、販売数は不明だが、一例として、日本セクションのステレオ写真は50~100セットほど販売された。